

ザ・コンバセーション

6月29日

## ウクライナはなぜワグネルの乱を活用できなかったのか

Why Ukraine has been unable to capitalize  
on the Wagner Group rebellion

<https://theconversation.com/why-ukraine-has-been-unable-to-capitalize-on-the-wagner-group-rebellion-207487>

By アレクサンダー・ヒル（カルガリー大学教授）

ウクライナの反攻作戦は、いつ始まるのか、その目的は何なのか、数カ月にもわたる憶測を経て、6月初旬に開始された。

ウクライナのゼレンスキー大統領は6月10日、反攻が実際に始まったことを認めたが、その数日前に初期段階が始まっていたことはロシアのメディアからも明らかだった。

反攻が鳴り物入りで発表されなかった理由のひとつは、おそらく計画通りに進んでいなかったからだろう。最初のウクライナ軍の損害は大きく、ほとんど得るものはなかった。ウクライナ軍は当初、ロシア軍の戦線に大きな弱点がないかを探っていたのだろうが、見つからなかった。

ロシアの情報筋はすぐに、戦闘が激しいことを認めた。反攻の勢いは十分かもしれないが、まだ始まっていないかのように見せかける試みは確かに誤解を招く。

### 多大な損失

ウクライナはこの反攻のために、西側から供与された相当量の装備と多数の兵力を集めた。そのうちの相当量がすでに投入されているのは確かだ。損失も大きい。

ロシア国防省はすぐに、破壊された西側の装甲戦闘車両が写真を提供し、西側の装備は万全とは言い難いことを強調した。これら損失は西側の情報源によっても確認され、例外的なものとは言い難い。

数週間の戦闘を経て、この反攻作戦が成功するとの以前の楽観的な期待は達成されそうにないことが明らかになった。同時に、ロシアのワグネル・グループによる反乱、クーデター未遂にウクライナと西側は幸福感に浸ったが、短命に終わった。とん挫したプリゴジンの行動は、ウクライナが期待したような戦場での優位をもたらしていない。

多くの観測者たちが予測したように、ウクライナの努力の多くは、南東部のアゾフ海に到達するためにロシアの戦線を突破しようとすることに費やされている。そうすれば、クリミアへのロシアの陸路を断ち切ることができる。ただウクライナ軍にとっての問題のひとつは、彼らが名案と思ったことが、ロシア側にも予想されていたことだ。

## バフムト地方で戦闘続く

バフムト地方でもウクライナ軍は頑張っている。ここ数カ月でのロシア軍の前進を取り戻そうとしているようで、これは局地的な成功を収めている。ウクライナは2022年にハリコフとケルソンで2度の反撃に成功し、かなりの領土を奪還したが、これらの反撃は現在とはまったく異なる状況で行われた。どちらのケースでも、ロシア軍はウクライナの反撃に直面し、撤退を選択した。

ロシア軍は2022年秋の時点よりもはるかに規模が大きくなっており、昨年9月以来、30万人以上のロシア軍が動員されている。

2022年にはロシア軍は不意を突かれ、反撃に対処するための資源もなかったが、今回は準備ができています。ロシア軍には数カ月間、綿密な防御態勢を整える時間があった。

防御態勢に入ることによって、ロシア軍にとっては2022年に直面した補給の問題を軽減できるというメリットもある。ロシア軍の装備はまた装備をうまく活用している。これらの装備は西側諸国では時代遅れと見なされているが、適切な環境下ではまだかなりの価値を持つ。

## ロシア軍の適応

ロシア軍は2022年以降、戦争の性質やウクライナ軍について確実に学び、適応してきた。一例を挙げれば、ロシア軍は、ウクライナの対戦車兵器に対する脆弱性となっている装甲車の熱のサインを軽減する措置を講じている。最後に、ロシア国民とそれを支える軍隊は、戦争が長引くとみて困難な状況に備えている。多くのロシア人は、西側諸国とウクライナが中身のある交渉ではなく、事実上ロシアの完全敗北を求めている以上、ロシアは戦い続けるしかないと感じているようだ。私は個人的にそのようなロシア人を多く知っている。

ワグナー・グループの最近の反乱やクーデター未遂は、ロシア軍指導部内の権力争いや戦争の進め方に関するものであり、戦争を継続すべきかどうかに関するものではなかった。このことを示す確実な証拠がある。とはいえ、プ

リゴジンによる短時間の反乱で、プーチン政権が大恥をかいたことは明らかだ。

ウクライナ軍には確かにやる気のある軍隊がいるし、西側の装備もかなりある。しかし航空優勢はない。これこそが1991年と2003年の湾岸戦争で西側兵器が壊滅的な効果をもたらした地上進攻を促進したのだった。西側のF-16戦闘機が数十機飛来したところで、ウクライナの航空状況はおそらく変わらないだろう。

## 双方とも大損害

ウクライナ軍も、無限の人的資源を持っているわけではない。西側メディアでは、ロシアの損失推定や人的資源問題について多くのことが書かれているが、ウクライナの損失についてはほとんど書かれていない。

ロシアは大量の兵員を失い、兵役に就く資格のある男性の相当数が海外に逃亡している。ウクライナもまた、代替が困難な大損害を受けており、数百万人のウクライナ人が国外に流出している。すべてのウクライナ人男性が戦いを望んでいるわけではない。

ウクライナは人口がはるかに少ないため、ロシアのような人的資源がないのは確かだ。

ウクライナには、西側諸国がどのような装備を提供しようとも、反攻を続ける余力はない。反攻が進む中、ウクライナに投入される西側の追加資源は、ウクライナの立場を強化するかもしれないが、決定的なものにはなりそうもない。

好むと好まざるとにかかわらず、昨年秋に私が示唆したように、遅かれ早かれ、双方ともこの戦争に「勝利」する可能性は低いと認めざるを得なくなるだろう。

## どう決着をつけるのか？

どこかの時点で、朝鮮戦争のような停戦交渉が必要になるだろう。

さらにエスカレートすれば、おそらくNATO軍を巻き込み、核兵器が使用される危険性もある。ありがたいことに、ロシアの政策担当者の中では、核兵器使用の可能性に関する議論は、少なくとも今のところ、極めて仮説的なものにとどまっている。(了)

### (AALAニュース編集部)

筆者は、カナダのカルガリー大学教授。ソ連、ロシア軍事史の専門家。記事には詳細な情報の出所が明記されていますが、日本語訳では割愛しています。関心のある方は本文で参照してください。記事は、英国の情報サイト「ザ・コンバセーショ

ン」に、著作権・版權を主張しない「クリエイティブ・コモンズ」として、以下のステートメントとともに掲載されています。

「筆者は、本論文から利益を得るかもしれない、いかなる企業や組織にも勤務しておらず、コンサルタントでもなく、株式を所有しておらず、資金提供も受けていない」。